



“自信”の種をまく仕掛けを

民放のバラエティー番組「新しいカギ」。そこに、昨年11月「ハイスクール大喜利」のコーナーが加わりました。霜降り明星の粗品が率いる、とある高校の全校生徒が、芸人チームに大喜利で挑むというもので、「図書室で一度も借りられていない本を発見。そのタイトルは？」などのお題に生徒が回答。その中から粗品が選んだ“おもしろ回答”を、芸人の回答と交互に披露し、ゲスト審査員がジャッジ。おもしろさを競います。キャッチコピーは次の通りです。

「僕は私は、本当はおもしろい！」 笑いで人生を変えたい生徒大募集！
大喜利に答えておもしろければ 粗品に選ばれカギメンバーと真剣大喜利バトル！
日本中におもしろさを見せつけろ！
(番組HPより)

粗品が読み上げる度に、体育館は生徒の大爆笑に包まれます。番組では収録後に、回答を考えた生徒へのインタビューが流されるのですが…

「自分に自信がもてなかったんですけど、皆が笑ってくれて、少し自信が湧きました！」
まるで口裏を合わせたかのように、どの生徒も同じことを言うのです。その話しぶりから、単に“おりこうさんの無難に謙虚な発言”ではない印象を受けます。



キャッチコピーからも分かるように、この企画には、自分(のイメージ)を変えたいと思っている生徒に光を当て、背中を押してあげようという意図があるようです。

「本当はこんな自分なんだと皆に知って欲しい」「もっとこういう自分になりたい」そして「皆から認められたい」「自分に自信がもてるようになりたい」…

“9歳(又は10歳、小4)の壁”と言われる小学校中学年から自我意識のスイッチが入り始めると、実生活で殻を破れない自分を歯痒く感じる子が生まれてきます。

学校の日常には多くの自己表現の機会がありますが、周囲の目を気にして二の足を踏むというのであれば、教師の側から子どもに光が当たる仕掛けを考えてみてはどうでしょう。その際には、子どもが活動の成否にかかわらず、結果として傷付くことがないように、護りの姿勢をはっきり示すことが大切です。番組では粗品が醸し出す和やかな雰囲気、それは言葉の温かさや気の利いたやりとりによるところが大きいと思うのですが、護りへの配慮を感じます。

子どもにとって、年度ごとの新たな出会いとそこで生まれる人間関係、そして活動・経験の積み重ねは、人格形成に大きく影響します。学校という安全装置の中で、護り手であり、仕掛け人である教師として、一人一人にスポットライトが当たる機会を、学級経営、授業、学校行事、生徒会・児童会活動などでいかに仕掛けるか、これも教職の醍醐味と言えます。

光の当て方には、日常の活動に取り組む姿や成果にスポットを当てる場合と、教師が意図的に課題(活動)を設定し、子どもの内にある未だ日の目を見ていない力を発揮させ(引き出し)、そこにスポットを当てる場合があります。前者では、認められる子が固定化しがちであるのに対して、後者の発想は、あらかじめどの子(どんな子)に重点的に光を当てるかが、戦略として練られるところが異なります。

気になる子、手のかかる子が仕掛けに喰いついて、新たな良い一面が垣間見られたら「してやったり」です。ほめる、認める、感心する、感謝する… 教師や仲間からの肯定的な反応は、情緒の安定や活動意欲の向上に繋がり、自分に自信がもてるようになる糸口になることでしょう。



担当：学校生活適応支援アドバイザー 飯山・大瀧
TEL 639-4392 / 支援要請は 639-4381 諸伏・石川